

創造的に考えを巡らせる中学校美術の在り方

～自己と他者を往還する対話型鑑賞法～

飯沼 沙知子 (教育実践コース)

1 探究課題について

(1) 探究課題の発見

生徒の感性や情操(道徳性)を高め、豊かな人間性を育むことを目標にしている美術という教科の重要性に正対した教育活動に取り組みたい。その際生徒の内側の部分(感性)を大事にすることが大切である。それには対話型鑑賞法が有効だと考え、その意義や授業の方法について探究した。

(2) 対話型鑑賞法について

① 対話型鑑賞法とは

対話型鑑賞法とは、「作品を見て、自由に語り合い、自分としての意味や価値を創り出すこと」と捉えている。今までの鑑賞教育の中心であった講義型、知識伝達型といった受身的授業ではなく、子どもの主体的な鑑賞を通して自己と他者を往還する多様な視点を育むものと考えられる。対話型鑑賞法は、造形的な視点を豊かに捉え多様な視点を養う上で有効である。

② 対話型鑑賞法における対話の定義

対話型鑑賞法における対話とは、「自由に語り合うこと」である。それには、自己との対話、作品(対象世界)との対話、他者との対話の3種類がある。これら3つの往還こそが対話型鑑賞法の基本である。

③ 対話型鑑賞法で得られる造形的な視点

美術の学習において、作品に関する知識を正確に覚えるだけでは創造的に考えを巡らせるには十分ではないと考える。学習指導要領に示された造形的な見方・考え方を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、作品を「自分事」にすることでそれらはなし得る。また美術における作品に対して自分としての意味や価値を創出することの「知の創出」は、とても重要視される。

2 中学校美術における対話型鑑賞法の在り方

(1) 課題発見実習での学びの整理

① 美術科の目標

美術科の目標

1 教科の目標

教科の目標は、小学校図画工作科における学習経験と、そこで培われた豊かな感性や、表現及び鑑賞に関する資質・能力などを基に、中学校美術科に関する資質・能力の向上と、それらを通した人間形成の一層の深化を図ることをねらいとし、高等学校芸術科美術、工芸への発展を視野に入れつつ、目指すべきところを総括的に示したものである。

(中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編 P.9)

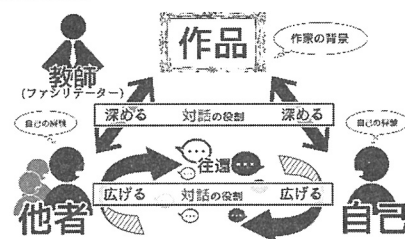
美術科に技能を強く求める時代は終わり、美術を通した人間形成が重要視されてきていると考えられる。

② 自身の課題意識

私は美術・芸術作品は生徒自身の生活や経験と結びついているものであることを理解させること大切にしている。美術教員は芸術家を育てるのではなく、美術の授業を通して人間性を育てていくことを忘れてはならない。人間性を育むためには、創造的に考えを巡らせることが重要なのである。

(2) 対話型鑑賞法の探究

① 造形的な見方・考え方を働かせる対話型鑑賞法



【図1】 対話型鑑賞法の説明

対話型鑑賞法では教師(ファシリテーター)を中心として、鑑賞した作品を自由な発想で対話をしながら深く掘り下げていく。教師がファシリテーターに徹することと、作品を観た時の感想を基にした自己と他者との対話の往還によって一つの作品を多面的な視点で考えることができる鑑賞法である。

対話型鑑賞法とは、自分の中に作品の価値を見出し、それを他者と共有することで新たな考えを生み出す鑑賞である。

(3) 対話型鑑賞法の授業実践

1 時間目はゴッホの「星月夜」で描写されているものを注目させ、生徒が見た印象を基に考える。作品は作者が1人で作っているときは自分だけのものであるが、発表した段階で捉え方は鑑賞者の主観が重要視されることに気づかせる。

2 時間目はモネの「ラ・ジャポネーズ」という作品から「日本の美術」とは何かと改めて考えさせるきっかけとなる授業を行う。また日本人の視点から作品を自由に批判してもいいことを理解させることもねらいとしている。

① ゴッホ「星月夜」

【授業観・ねらい】

造形的な見方・考え方を働かせるために「技術的視点」「内容的視点」「資料からの考えの変容」の3つを重点において対話を展開させた。

【授業の成果】

この鑑賞の時間では生徒が「自分の経験と重ねて絵を見ている」ことがわかった。

授業を通して以下の3点から生徒が自身の「考えの変容」に気づくことができた。

- ① 描かれている内容から
(52.8% 36人中19人)
- ② 作品の鑑賞の仕方・方法から
(61.1% 36人中22人)
- ③ ゴッホの制作背景(資料・情報)から
(30.6% 36人中11人)

【考えの変容を生み出す要素】

前半は描写をもとに様々な絵の見方をしているように感じたが、後半は資料で示された作品の元となった場面と作品に描かれていることとのズレから生徒が作者自身になり切って作品を解釈している様子がうかがえた。

② モネ「ラ・ジャポネーズ」

【授業観・ねらい】

造形的な見方・考え方を働かせるために「良いと思うところ」「変だなと思うところ」「資料からの考えの変容」の3つを重点において対話を展開させた。

【授業の成果】

2時間の授業を通して以下の2点から生徒が自身の「考えの変容」に気づくことができた。

- ① いろいろな視点で観ることから
(77.1% 35人中27人)
 - ② 自由な鑑賞の仕方から
(77.1% 35人中27人)
- ②の中には、作品を批判的に観るという鑑賞の仕方について記述した生徒もいた。(14.3% 35人中5人)

【考えの変容を生み出す要素】

作品に描かれた内容と自身の日本文化に対するズレから日本の美について気づき記述した生徒(22.9% 35人中8人)

【成果と課題】

授業を行ったことで作品は作者の表現したい考え以外にも受け手は「自由」に観ていいということを知り、考えの変容が見られた。また、このことから技能の良し悪しに関わらず自分の作品制作に自信を持つことができた生徒がいた。

課題は生徒に対して説明が多く内容が誘導的になること、それに伴って対話型鑑賞の時間が減ることである。また、対話型鑑賞法では、生徒が作品を「自分事」として捉えることの重要性が見えてきた。

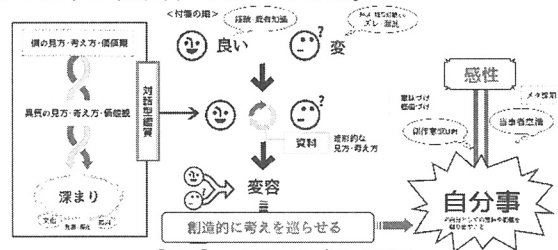
3 自分事として捉えるための方略

～創造的に考えを巡らせることを通して～

(1) 創造的に考えを巡らせることと「自分事」

- ① 「創造的に考えを巡らせること」、「造形的な見方・考え方」、「造形的な視点」、「自分事」の関係

対話型鑑賞法を実践し、これら四点の関係を図2のように見出すことができた。



【図2】 対話型鑑賞法の説明

生徒が「自分事」として鑑賞した結果、次の作品鑑賞及び制作への展望を抱く姿が見られた。

② 「自分事」とは

「自分事」とは自分としての意味や価値を創り出すことである。これには、次の点が深く関係する。

【メタ認知との共通点】

メタ認知的方略(意味づけ、価値づけ)が自分としての意味や価値を創り出すことである「自分事」に共通している点だと考える。

【当事者意識】

当事者意識とは、本人が目の中の作品の関係者であると自覚をしていることである。

【人間形成のための美術】

人間形成のための美術とするために、生徒の「自分事」となるような授業を展開していく。

(2) 対話型鑑賞法による美術の「自分事」

① 美術を「自分事」とする

技能重視の授業では、美術を「自分事」とすることができない。作品や創作に対する自己理解、他者理解の上で、生徒が自分の意思をもって作品に関わることが重要である。

② 対話型鑑賞法の有効性

対話型鑑賞法では、自身の考えを自由に他者に伝えたり、他人の発想を受け入れたりすることが大切になる。作品を楽しむ体験を他人と共有することによって生徒が主体的に創造活動に取り組み、それが作品を「自分事」として捉えることにつながっていく。

(3) 美術科の授業実践

① 授業観・ねらい

戦時中の日本とポーランドの子どもが描いた絵から作者自身になり切る、当事者に意識を重ねる等「自分事」として鑑賞させる。

造形的な見方・考え方を働かせるために「内容的視点」「感情的視点」の2つを重点において対話を展開させた。

② 授業の成果

生徒は、以下の4点から、作品を「自分事」として捉えていた。

①環境(国の置かれた状況)が変わると作品が変化することから(86.1% 36人中31人)

②平和の意味から(77.8% 36人中28人)

③作品のポジティブ要素(戦争の絵=悲しい、悲惨だけではない)から(38.9% 36人中14人)

④子どもの作品の意味(込められた感情など)から(61.1% 36人中22人)

③ 課題考察

以下の2つが課題にあがった。

1 つめは情報量の絞り込みである。題材の情報量が多く、作品の読み取りに時間がかかってしまったため、「振り返り」を共有する場面を設定できなかった。その結果、対話的鑑賞法の学びが深まらなかった。

2 つめは対話のポイントの指示である。生徒が対話の観点のポイントの指示が不明確であったと思われる。その結果、生徒がどのような基準で「自由」に対話しているのか混乱している様子が見られた。

(4) 対話型鑑賞法による教科横断の可能性

① 道徳科との親和性

道徳科の目標の「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」という部分と美術科の目標の「感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度」

というこれらの2つの態度は「自分事」という観点から親和性が高いと言える。

② 道徳科の評価

対話型鑑賞法によって変化する考えを①自分の考えを持つこと②当事者である作者の考えと対話をした他者の考えを受け入れて思考することとした。「自分事」とするために生徒が考えられるように授業では手立てとして当事者や他者と共感する場面を用意することが重要と考える。

(5) 道徳科の授業実践

① 授業観・ねらい

戦時中の日本とポーランドの子どもが描いた絵から作者自身になり切る、当事者に意識を重ねる等「自分事」として鑑賞させる。

造形的な見方・考え方を働かせるために「内容的視点」「感情的視点」の2つを重点において対話を展開させた。鑑賞の途中で「考えの変容及び考えの深まり」を生じさせるために、当時の青年が故郷の母親に綴った手紙を紹介している。

② 授業の成果

生徒は、以下の4点から、作品を「自分事」として捉えていた。

①環境(国の置かれた状況)が変わると作品が変化することから(国際理解・国際貢献)(67.7% 34人中23人)

②人によって感じ方が違うことから(相互理解・寛容)(41.2% 34人中14人)

③平和の意味から(国際理解・国際貢献)(76.5% 34人中26人)

④今を生きる自分自身と照らし合わせることから(相互理解)(41.2% 34人中14人)

③ 授業における生徒の様子

【生徒Aの振り返り】

生徒Aはもともと戦争批判の意見を持っていたが、この授業を通して「自分事」として捉え、考えの深化につながったことがうかがえた。

【生徒Bの何気ない考えが生徒Cに影響を与えた】

生徒Bは自分の考えを他者に伝えることがあまり得意でないが、困難ながらも記述を残した。その記述を生徒Cが「自分事」として解釈し、考えを再構築させていたと考えられる。つまり対話型鑑賞法は、対話を通して相手の見方・考え方を広げたり変容させたりする可能性があると言える。

④ 課題考察

対話する場面を設定したことは道徳的心情を育てることにつながることを実感した。対話型鑑賞法は、わかりにくい美術作品をかみ砕いて把握す

るに適した方法である。作品鑑賞の行為自体を言語化し、人に伝えやすくすることで思考の幅を広げる。この対話型鑑賞法で得られる資質・能力は美術の専門性に特化した行為ではなく、人間形成のためのものとも言える。美術科に限ったことではなく、他教科にも応用可能である。

4 課題と今後の展望

(1) 授業実践を通しての成果と課題

① 成果

対話型鑑賞法で「考えの変容や深まり」を生む次の2点の手立てを行った結果、生徒は作品を「自分事」として捉えていた。

① 生徒にズレを認識させる

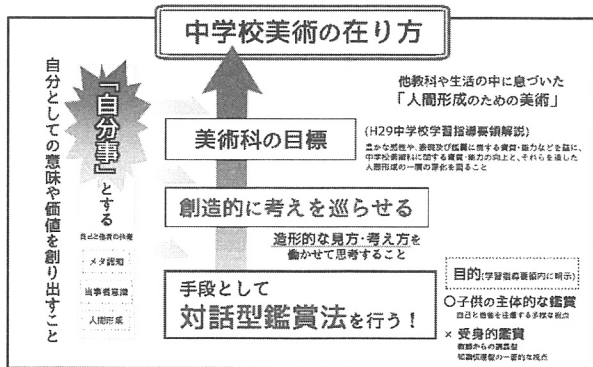
描かれているものを根拠に対話することによって、他者と見え方や感じ方が違うことを理解できる。否定をしないという対話型鑑賞法のルールから、他者の考えに寄り添うことができた。また、既知とのズレを生む資料から見方が自分自身からの一方向ではなく、作者になり切って考える姿が見られた。ズレを認識させることの有効性が明らかになった。

② 鑑賞における「自由」であることへの理解

美術の表現や鑑賞に答えはなく「自由」とされている。しかし、鑑賞の授業でも生徒は答え(教師が求めている意見)を見つけようとする傾向があった。そこで、どのような意見や考えも受け入れることを繰り返し説明した。生徒がどのようなルールの上で「自由」なのかわからず戸惑っていたのだということを実践を通して理解できた。

上記に示したように対話型鑑賞法を行うことで生徒は主体的に作品を鑑賞し、自分としての意味や価値を創り出すことができる。まさに人間形成のための美術になり得る。

当初「自分事」を美術科独自の視点から考えていたが、メタ認知や価値付け、意味づけ、他者理解と深く関係していることがわかった。創造的に考えを巡らせるには、造形的な見方・考え方を働かせる必要がある。造形的な見方・考え方をすることによって、自分としての意味や価値を創り出すという「自分事」となるということが生徒の見取りから明らかになった。研究の成果を図3に整理した。



【図3】 本研究の概要図

② 課題

対話型鑑賞法の成果は、作品制作とも深く関わり、美術科の授業全体において有効に機能することが見えてきた。生徒が作品を「自分事」として捉える授業を実践する上で、次の課題がある。

① 対話型鑑賞法と表現との往還

大切なのは、単に「生徒に技能を教える」ことではなく、「生徒に技能を『自分事』として捉えてよいことに気づかせる」ことである。生徒がそれに気づける工夫として、生徒自身の作品に対する躰みや気づき、技能向上への意識から探っていききたい。

② 目的意識をもたせること

作品制作において「自分事」となっていなければ、その作品をどうしたいかという目的意識が薄くなる。「生徒の視点になって授業を考える」ことが重要であり、それこそが生徒が「自分事」として考えられるようになる要因となり得る。

③ 対話の生まれる環境をつくること

授業内で生徒が「自分事」となり得る対話が生まれる環境づくりには2種類あることに気づいた。1つ目は、時間設定である。教材のもつ情報量を絞ったり、教師の伝えたいことを要領よく伝えたりすることによって、生徒同士が対話する時間を増やすことがポイントとなる。2つ目は遠慮なく、気兼ねなく話せる人間関係づくりである。常に自身と友人の作品制作について語る場面づくりをしておくことで、教師と生徒の対話だけでなく、生徒同士が対話する場面をつくることことができる。制作の中でも「自分事」として常に考え、表現できる環境づくりを心掛ける。

「自分事」とは、教育活動の全てに共通して言えることであり、「中学校美術」が「人間形成のための美術」たり得るのだと感じた。自己と他者を往還する対話型鑑賞法だからこそ見出すことができたと考える。